

(2)政治における自由主義

政治の領域では、丸山は大学時代から一貫して自由主義とファシズムを対立的に捉え、前者の立場から後者を批判する姿勢をとっていた。

1939（昭和14）年8月の独ソ不可侵条約締結は、日本の知識人を驚愕させた。丸山の周囲では、自由主義からファシズム的な全体主義ないし国家社会主義に移行することが世界的必然と考える立場と、ナチス・ドイツと結ぶソ連を批判する立場に分かれた。丸山は後者の立場に与（くみ）し、本郷キャンパスの食堂で磯田進と激論を交わしている。だが、ファッショ陣営の大立者ドイツと反ファッショ陣営の先鋒ソ連の提携は、ファッショ—反ファッショの図式を揺らがせ、歴史の混沌とした現実を丸山に印象づけた。

1941（昭和16）年6月の独ソ戦開始は、丸山にとって曖昧なものとなっていたファッショ対反ファッショの図式を明確化させるという意味をもつ出来事だった。丸山は開戦の報道に触れたときのことを次のように回想している。

ぼくは家でバンザイを叫びました。ぼくの頭の中の図式に独ソ不可侵条約はどうしてもうまく収まらない。ドイツがソ連と開戦した。ソ連は直ちに英米と同盟を結んだ。そうすると共産主義を含めた自由主義対国際ファシズムという図式で割り切れるようになった。曖昧になっていたファッショ対反ファッショという図式がはっきりしたわけです。（『定本 丸山眞男回顧談』上）

大学3年生のときに執筆された丸山にとって最初の論文「政治学に於（お）ける国家の概念」（『緑会雑誌』第8号〈1936年12月〉：画像）では、かつて存在していた自由主義と資本主

義との適合関係が失われた時代として現代が位置づけられている。独占化が進行する金融資本の段階に至った資本主義にとって、自由主義は桎梏に転化し、それを打破するためにファシズムが資本によって支持されているという見立てであった。しかし、自由主義それ自体にコミットするようになっていた丸山にとっての問題は、ファシズムによって自由主義の問題を克服するのではなく、資本主義の支えを失った自由主義をどう根拠づけるのかということであった。

